
キルクルス・ラクテウス

ビッキー・ホリディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キルクルス・ラクテウス

【ISBNコード】

N5948V

【作者名】

ビックキー・ホリディ

【あらすじ】

修学旅行での夜、僕は星に迎えられ不思議な世界へ行った。そこは美しく、きらびやかな世界だった。とても現実とは思えない世界をさまよっていると、僕が片思いをしているマイちゃんが現われた。「この小説はブクログでも掲載しています。

僕は昼間のバスで食べたポテトチップスの残りをつまみながら、窓の外を眺めていた。田の前には海が広がっていて、それはすべてを飲み込んでしまえそうなほど暗く、夜空との区別がつけられないほどだった。窓を開けると潮風が僕の髪を優しく揺らした。湿気が少なく流れる汗もすぐに乾いてしまうような夏の夜に、それは適度な湿気を運んできてくれた。僕は身を乗り出して景色をよろしく見た。その拍子にポテトチップスを落としてしまった。

空を見上げると驚くほどハツキリと星が見えた。キラキラと光る星は、まるで僕の好きなマイちゃんの流す涙。僕は一度だけ見たことがあるのようだった。そうか、と僕は思った。海には星がない。だけど空にはある。これで区別がつけられるじゃないか、と。ふと振り返って部屋を見渡した。みんな寝てしまっている。あれだけ徹夜をしようとした張り切っていたのに。お父さんから借りてきたデジタル腕時計を見ると、午前三時ちょうどだった。そろそろ僕も寝ないと明日が辛いな、とは思ったけど、どうも眠れる気がしない寝たらもったいないような気がして、また僕は星空を見上げた。東京では見られない空だ。マイちゃんも見ているのだろうか。いや、きっと寝てしまっているだろう。この空を、マイちゃんと一緒に見られたらどんなにいいだろう。こんな修学旅行なんて抜け出しだで、小学校最後の思い出を一人でつくりたい。

そう思つた瞬間に、流れ星を見つけた。なにかお願いをしなくちや、と考えているうちにまた星が流れた。そうかと思えばまた。星が海に降り注いでいる。その様子は美しくもあり、同時に世界の終わりを見ていよいよ恐ろしさを感じた。

流星群はやがて一筋の光となり、レーザービームのようになっちゃへ向かってきた。そして僕のいまいる部屋まで届くとそこで動きが止まった。光の筋はいつの間にか帯となり両手を広げたくらいの幅

ができていて、銀河まで続く道のようだと思った。僕は窓をまたいで光の道に片足をつけた。それは雲のようにぼんやりとしているけど、舗装された道路のようにしっかりとしていて、どうやら歩けそうだった。僕は静かにその道に乗り、部屋の窓を閉めてから歩き出した。

光の道は下に見える海の向こうまではうつと延びていて、気が遠くなる思いだつた。それでも僕は引き返す気持ちにはならず、ひたすら歩き続けていた。歩きながら空を見上げると、さつきよりもずっとよく星が見えた。無数にある星々のひとつが空からこぼれるように流れ、あつという間に僕のところまで来た。手のひらに乗るくらいの、小さな星だつた。僕がその星に触ると、星はいつそう輝きが増して、僕の自転車くらいの大きさまで膨れあがつた。僕はまぶしくて目をつぶつた。それでも光は僕のまぶたを抜けて、目の中に入つてくるようだつた。光が静まり、僕が目を開けると、そこはなにものにも喻えようのない世界が広がつていた。

僕がいまいる場所はダイヤモンドの砂でできた道だつた。すぐ右手にはエメラルドの川が流れついて、ルビー や サファイアなどといった宝石が底に、まるで砂利のようにあつた。水を手ですくうと、その水は緑色に輝いていた。空を見上げると完全な黒色をしていて、星は見えなかつた。僕はダイヤモンドの砂を踏みしめて前へ歩き出した。歩きながらきょろきょろと周りを見ると、その景色の美しさに言葉も出なかつた。川の向こうはダイヤモンドの砂漠が広がつていて、キラキラと輝いていた。僕がいま歩いている側は、横に二、三歩歩けば芝桜のような美しい花が無機質に輝き、遠くまで咲き乱れていて、そこを僕の半分くらいの背丈をした小人が五、六人で輪になつて踊つっていた。その上をクリスタルの馬が同じくクリスタルの荷車を引いて空を歩いていた。

視線を正面に戻すと、純白のドレスを着た女の子が僕に手を振つていた。誰だろうと目をこらすと、その女の子はマイちゃんとわかつた。マイちゃんは僕に駆け寄ると、ぱっと花が咲くように笑い

かけて僕の手を握った。柔らかくて、ひんやりとしていた。僕は顔が紅潮するのを感じたけど、マイちゃんは特になにも意識していないようで、「行こう」「行こう」とだけ言つとぐれりと僕と同じ方向を向いて歩き出した。

マイちゃんの横顔は、ここにあるどんなものよりも綺麗だった。純白のドレスがさらに魅力を引き立てる。じつと横顔を見ていると、マイちゃんは僕を見た。目が合つと彼女はほうすらと微笑んでまた正面を向いた。

「綺麗だなあ

思わず僕は口に出してしまった。彼女が僕の顔を見た。僕はハッとして彼女から目を逸らした。

「綺麗だよね。わたし、このアレキサンンドライトのお花畠が好きなんだ

どうやら僕が芝桜だと思っていたのは、アレキサンンドライトだったようだ。それにしても、と僕は思った。マイちゃんがこんなに笑つていてるところを見るのは初めてだった。僕が見ていたマイちゃんは、いつもなにかにイライラしているような気がして、先生の目が届かないところで僕を蹴つたり撲つたりしていた。僕はそんなマイちゃんしか見ていないから、あんなに優しい笑顔ができるとは思つていなかつた。

こうして一人きりで手を繋いで歩くだなんて、夢のようだつた。いつも放課後は昇降口でマイちゃんを待つて、一緒に帰ろうと思つていたけど、彼女は僕を見つける度に友達と一緒に僕を袋だたきにした。殴られて口の中を切つても、身体中あざだらけにされても、服をぼろぼろにされても、僕はマイちゃんが好きだった。一緒に帰りたかった。だけどそれはいつまで経つても叶わぬ夢でしかなかつた。

僕はもう一度彼女の横顔を見た。僕の胸の鼓動が激しくなつた。それと同時にふわふわと、空を泳ぐような気持ちになつた。また目が合つた。彼女は冬の夜のように澄んだ瞳をしていた。いつも僕を

見る目とは全然違つた。でも僕は普段の獵奇的な、冷めた瞳も好きだつた。睨まれたときのあの氷柱で心臓を貫かれるような、あの感覚が好きだつた。

「着いたわよ」

僕はその言葉を聞いて、ハツと顔を上げた。マイちゃんは僕の手を引っ張つて、アクアマリンでできた家の中へ、ドアを開けて入つていつた。

「ここは？」

僕がそう尋ねても、マイちゃんは答えなかつた。その代わりに「わたしの体育着を盗んだの、君でしょ？」

と訊いてきた。僕の心中で、今まで積み上げてきたものすべてが音を立てて崩れていつた。さあつと血の氣が引くのがわかつた。どうして、どうしてわかつたんだ。

マイちゃんはそれでも無垢な笑顔を崩さなかつた。そうだ、確かに僕はマイちゃんの体育着を盗んだ。放課後の教室、みんな下校したあとに僕はマイちゃんのロッカーに入つて体育着を手に取り、それに顔をうずめた。太陽や砂埃の臭いと一緒に、酸っぱいような臭いがした。これがマイちゃんの汗の臭いか、と思うと不思議と下半身の一部がうずいた。そして僕はそれをランドセルに詰めて学校を出た。

それからすぐに僕は教室に忘れ物をしたことに気づいて、帰り道から学校へ戻つた。教室に入ろうとしたときに、マイちゃんが自分のロッカーの中を見て立ちすくんでいるのを見た。僕は動けなかつた。じつと見ていると、なにかが夕陽の光を受けてキラリと光つた。それがマイちゃんの涙だと気づくのに時間は要らなかつた。

綺麗だつた。しばらくそのまま見ていると、マイちゃんが僕に気がついた。目に涙を溜めたまま、マイちゃんは無言で僕に歩み寄り、みぞおちを蹴つてきた。僕がうずくまると、今度は僕のこめかみを殴つた。思わず床に倒れ込む。それでも構わず、めちゃくちやに蹴つてきた。その間、マイちゃんはなにも言わなかつた。僕は蹴りが

入るごとに背筋に電気が走り、全身が震えるような感覚がした。それは覚えたばかりのマスターべーシヨンよりも気持ちがよかつた。マイちゃんはぜえぜえと肩で息をしていた。僕はペニスが脈打つているのを感じていた。失禁していたのだ。マイちゃんは僕のことなど最初から気づいていなかつたように、見向きもせずに去つてしまつた。

僕がそのときのことを思い出している間も、マイちゃんは笑顔を崩すことはなかつた。僕は素直に「うん」とうなづいた。

「やつぱりね」

そう言うとマイちゃんは僕に歩み寄り、そつと僕の頬にキスをした。それからマイちゃんは僕に背を向けて家から出ていってしまった。あまりに突然のこと、僕はぼうつと立つてゐるしかなかつた。あのマイちゃんが、僕にキスをした。頭の中はそのことでいっぱいだつた。アノマイチヤンガ、ボクニキスクシタ。

僕はマイちゃんを追あつと、ドアを開けた。しかしそこで見たのはどこまでも続いているラベンダー畑だつた。空は雲一つない快晴で、太陽の光が降り注いでいる。暖かくて気持ちのいい風が吹き抜けて、それに乗ってきたラベンダーの香りが鼻をくすぐつた。

僕はアクアマリンの家から出てそのまま少し歩いた。永遠にさえ思えるほどに広がっているラベンダーが、風がそよぐたびにざざ波のように揺れる。ふと振り返ると後ろにもずつと続いていた。アクアマリンの家はどこにもなかつた。

僕は仰向けに倒れた。ラベンダーの茎がぽきりと折れる音がした。目の前に映るのは晴れわたつた空だけだつた。ほかにはなにもない。何気なく空に向かつて手を伸ばすと、ふわりと身体が浮かぶような感覚がした。僕が立ち上ると、身体が地面から浮いていることに気がついた。それから階段を登るように一歩一歩空に向かつて歩いた。僕はただひたすら登つていつた。

下を見ると僕がいた場所は、四方をコバルトブルーの海で囲まれたラベンダー畑だとわかつた。ラベンダー以外のものは見当たらな

かつた。海にぽつんと浮かぶその紫の孤島は、細くて美しい指につけられた、例えばマイちゃんの指につけられたアメジストの指輪のようだった。

空を見上げると青空ではなく、ダイヤモンドの砂漠とエメラルドの川が見えた。どれくらいの間登ったのかはわからないけど、手を伸ばせばダイヤモンドの砂漠に届きそうだった。僕は背伸びをして砂漠に手をかけた。プールから上がるような気持ちで砂漠に立った。見上げた空は黒かった。

川を隔てて向こう側はアレキサンドライトの花畠が広がっていて、遠くのほうでは小人が踊っていた。マイちゃんはどこへ行ってしまつたのだろう。辺りを見回しても、それらしき人は見つからなかつた。砂漠の向こうから、輝くなにかがこちらへ向かってきた。僕はそれを迎えに近づいていった。クリスタルの馬車だった。

「すみません」

僕はマイちゃんの行方を尋ねようと、馬車を止めた。荷車の中は銀色のヴェールで遮られていた。中から白くて綺麗な指が現われ、ヴェールをよけた。

「マイちゃん」

マイちゃんはさつきと同じように優しく僕に微笑みかけた。僕はマイちゃんに手を引かれて馬車に乗った。中は一人乗つたらいいっぱいだった。馬車はすぐに動き出した。ダイヤモンドの砂をザックザックと踏みしめて進んでいく。僕はヴェールを手でよけて、外の景色を見ていた。後ろではエメラルドの川が遠くでキラキラと光っている。前を見るとトパーズやガーネットなどの花畠が広がっていた。マカライトの泉が、僕らを歓迎してくれているかのように輝く水を噴出させていた。

馬車はその花畠まで来ると、僕がラベンダー畠で空を歩いたのと同じよう、空に向かつて進んでいった。エメラルドの川、ダイヤモンドの砂漠、踊っている小人たち、トパーズやガーネットなどの花畠、マカライトの泉、そういうものがだんだんと遠く離れてい

つて、ついに深い闇に溶けて見えなくなってしまった。クリスタルの馬車は闇の中をひたすら進んでいる。スポットライトで照らされているよつこ、馬車だけが輝いていた。僕は少し不安になって、隣にいるマイちゃんを見た。穏やかな表情でじっと前を向いて、目を閉じていた。まるで幸福な夢を見ているかのような様子だった。

声をかけるのが悪い気がして、僕はまた外の景色を見た。馬車は虹の上を進んでいた。周りには星が、まるで宇宙から見ているかのようにはつきりと輝いて見えた。

「もう少しよ

隣を見るとマイちゃんが一いちらを向いて、僕をじっと見ていた。

「ねえ、これあげる

マイちゃんが差し出してきたのは、僕らの学校の体育着だった。胸のところにはマイちゃんの名字が書かれていた。どうしてマイちゃんがこれを持っているんだ、これは僕の部屋にある勉強机の、鍵付きの引きだしにしまってあるはずなのに。その鍵は僕がいつも持っているはずなのに。

僕は曖昧にうなずくと、マイちゃんの体育着を受け取った。するとマイちゃんの身体から光が放出され、やがて手のひらに乗るくらいの星になってしまった。その星は馬車の外へ飛び出し、空へ向かって流れてしまった。あつとう間の出来事だった。

マイちゃんのいない馬車は、ずいぶん寂しく感じた。心中もがらんがらんになってしまったようだつた。僕に残されたのはこの体育着だけ。僕はそつと体育着に顔をうずめた。

暗闇。甘い香りのする暗闇。これを着てマイちゃんは逆上がりの練習をしたり、跳び箱を跳んだり、リレーをしたり、ドッヂボールをしたり、縄跳びをしたり、マラソンをしたりしていたんだ。そう考えると心臓が胸を突き破つて飛び出しそうなほどドキドキした。

マイちゃん、マイちゃん、マイちゃん、マイちゃん、マイちゃん、マイちゃん、マイちゃん、マイちゃん。

息ができなくなり、僕は体育着から顔を離した。目の前には僕ら

が修学旅行で泊まっているホテルがあった。波打つ音が後ろから聞こえる。空は暗く、星がよく見えた。腕時計を見ると、午前二時ちょうどだった。

はあ、とため息をつくと、空からなにかが落ちてきた。見ると、それは食べかけのポテトチップスの袋だった。

僕は眠くてたまらなかつた。三時まで起きていれば当然だう。朝になつたらみんなにここまで寝ずに起きていたことを自慢しなくては。マイちゃんもきっと僕のことを見直してくれることだう。そう考へると朝が楽しみになつてきた。僕はマイちゃんの体育着を手に持つて、ホテルのロビーへ入つていつた。

(後書き)

キルクルス・ラクテウスとは、ラテン語で「天の川」の意です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5948v/>

キルクルス・ラクテウス

2011年8月8日03時29分発行